あとがき

―さまざまな出会いに感謝―

2019 年８月上旬、大槌町災害公営住宅の一戸一戸を訪ねてまわりました。東日本大震災から９年目の夏のことでした。３つの大学の学生や大学院生、そして私たち研究者たちも、お願いにあがりました。あれから９年という年に。

2011 年 3 月 11 日の大地震の時に、私は大学の研究室にいました。いままでに経験したことのない大きなゆれが長く続き、尋常ではないと思いました。研究室の本や備品はどさどさと落ちてきましたが、その数日前に学生に頼んで本棚の整理をしてもらっていたため、本に埋もれるほどではありませんでした。翌日には大学入試（後期日程）を控えて、それもどうなることかわからないまま、自分が入試関係の役員ではないので、自宅の家族の元へと向かいました。家族は家から出て、自家用車の中で震えていました。

しかしながら、沿岸地域はそれどころではなかった。街がなくなったとかで、大槌町を含む沿岸の様子をつかめませんでした。陸前高田市と山田町と大槌町がとくにたいへんだということは、徐々にわかってきました。大学内では、緊急支援物資や文房具などを送り届けたりパソコンを提供したりとか、がれきの撤去に行く活動もはじまりました。

私は、数百年に一度ともいわれた災害が人々に与えた影響を記録したいと思いました。大災害で犠牲となった一人ひとりのことを忘れてはならないと思いました。しかし、被災地の様子をうかがいに行くのは、まだ早いのではないかと忠告してくれる同僚もいました。この方は、支援活動に熱心な元教授の先生でした。

そうして初めて大槌町へ私がうかがったのは、2011 年６月でした。各地区の核となる避難所は継続していて、仮設住宅が全面的に整うのは８月上旬といわれていました。そこで、2011 年 7 月下旬から避難所を訪問して、運営のリーダーの方がたから、被災からそれまでの様子をうかがいたいとお願いにあがりました。三陸の被災地では、数々の民営の避難所が立ち上がりました。公共施設に開設された避難所でも、地域の人びとの共助で運営されたり、寺社や民間会社、地区の活動団体の施設なども活用されました。その様子は、世界的に注目されました。

大地震の直後から、避難支援や救助に奔走し、また避難所の開設や運営にあたる人びとの活動に、復興に向けたエネルギーを感じました。その後、冒頭の野坂さんの「はじめに」にある通り、各種の調査を開始しました。こうした調査ができたのは、大槌町の皆様のご理解とご協力のおかげと、常に感謝の気持ちを忘れないつもりで９年間を過ごしてきました。そして「生きた証」では、被災で亡くなった方の記録を残そうとしました。現在は「生きた証をのこし語り継ごう」ということで、大槌町の数々の同志の方がたと活動を続けています。生前に知り合うことのなかった故人と、被災後に知り合ったかのように感じることがあります。それは、犠牲となった故人を思う遺族や近親者の想いを、私が知ることができたからです。昨夏の調査の時には「このような調査でいったい何が変わったのか」とお叱りを受けました。しかしたいへん恐縮ながら、「調査」が通りいっぺんの接点に終わらないように、大槌町のみなさんと私たちのコミュニケーションの機会として、後世に語り継がれる記憶や伝承にしていけたらと思います。

これまでの出会いとご恩に感謝に、これからのお付き合いを引き続きどうかよろしくお願いいたします。

2020（令和２）年８月

岩手大学教育学部教授　麦倉　哲